

電話相談スタッフ、新たに10名

CAPNAの電話相談スタッフ養成講座を修了した10名が、4月から新たに仲間入りしました。1年間の講座を通して、傾聴のトレーニングを重ね、虐待に関する法律、福祉などの勉強を積んで、いよいよ相談スタッフとしてスタートを切りました。

CAPNAの活動の中核は、16年間休むことなく続けてきた電話相談。新しい力に期待します。新メンバーの一人は、「養成講座を修了して」と題して、次のような抱負を寄せました。

「CAPNAという市民団体が困っている→活動内容は社会的貢献度大→私にできるのなら助けねば→講座を受けるだけでもきっと為になる」と気楽に考えてやってきました。

傾聴力実習の中の相手の話しかけた話題を、自分の話にすり替える実習などは、学校の必須科目にあってもいいし、社会人になっても定期的に身近なところで受けられればいいのに、と思いつながらやっていました。

しかし、講座・実習が進むうちに単に「人助けのため」という動機だけでは、この電話相談スタッフは長続きしないなと思いました。いろんな悩みを抱えた人と寄り添うことに重圧を感じて辞めていくのかなと考えました。しかし相談員という任務は「人助け」プラス「自分自身のためにやるのだ」ということに自己反省をする、向上心旺盛な先輩方を見て私は気づきました。CAPNAという場所は心を磨き、自分自身を成長させてくれる場なんだと。ここは他のボランティア活動とは少し違うところだと思います。

心を健康に保ち責務を果たしてまいります。みなさまどうかよろしく願い申し上げます。

困っている人たちの力になれるように、いいチームワークを築いていきたいと思います。今後とも、CAPNAへのご支援をよろしくお願いいたします。

☆総会は5月29日 第16回CAPNA定時総会は、5月29日(日)午前10時から、名古屋市市中村区名駅、ウイングあいち1204号室(愛知県産業労働センター、名古屋駅徒歩2分)で行います。会員の皆様へは、ニューズレター66号とともに、総会資料2010年度事業報告書を送付いたしました。お目通しいただいてご出席をよろしくお願いいたします。会計報告決算書・予算書2011年度事業計画書は総会当日に配布します。

ご寄付 皆様からご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

- 【個人】 (2011.1.1~2011.3.31分、順不同・敬称略)
谷口紀美江、鳥居かおり、岸井千幸、岩城正光、XXXXXXXXXX、石田金司、広橋智子、茶谷裕子、小久保裕美、加藤順子、鷹見直子、山根香代子、他匿名6名
- 【団体】 愛知県立西高等学校、トヨタ自動車、名古屋SORAソントクラブ、愛知県小児医師会
安城学園高校インターアクト部

CAPNA ニューズレター 66号

2011年4月15日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち
事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL.052-232-2880 FAX.052-232-2882
印刷 社会福祉法人名古屋ライトハウス光和寮

CAPNA

キャプナニューズレター66号

66

こんなに悲しい春を、いったい誰が想像したでしょうか。

東日本大震災の犠牲者の方々のご冥福を心よりお祈りします。そして、今も避難生活を続ける被災者の方々のために、私たちができることを考えていきたいと思っています。圧倒的な自然の破壊力の前に、人間はあまりにも無力だけれど、さまざまな「きずな」を考える機会にしていきたいものです。(震災特集は、2、3面に)



66

Vol.

黒き喪章を胸に、真っ白の帆を上げるとき

東日本大震災の震源に近い石巻市、東松島市、南三陸町を3月下旬に訪ねました。この地域だけで、犠牲者は1万人を超えるのが確実だそうです。人の死をこれほど身近に感じたのは初めての体験でした。私たちは、この途方もない震災から何を教訓として学び、子どもたちを守る運動に生かしていければいいのか…。被災地で感じたことをつづります。（CAPNA理事・安藤明夫＝中日新聞編集委員）

津波のつめ跡は、一様ではありません。

東松島市では、多くの地域で水が引かず、一面の“海”の中に、壊れた家や車や船が点在していました。

石巻市や南三陸町では、爆撃を受けたかのように建物が大破し、大量のがれきが住宅地を埋めていました。住宅の基礎部分だけを残してそっくり流され、何も残っていない「跡地」もたくさんありました。



床下を埋めたヘド口の中に、家族写真が1枚、はさまっていました。

玄関を押し流された住宅の白壁には、「茶の間に母の遺体を置いておきます。収容をお願いします」と連絡先を添えた伝言。遺体を残して避難せざるをえなかったのでしょうか。胸が詰まりました。

石巻市で炊き出しボランティアをしていた40歳の男性も、家を流され、母親を亡くしました。

「うちは、遺体がすぐに見つかって、葬式も出せたからまだ幸せだった。でも…」と言葉が途切れました。

遺体安置所で、母親の遺体と対面した際、そのわきに、通園バスに乗っていて亡くなった10数人の園児の遺体が安置されていて、その光景を思い出すとつらくてたまらないそうです。

避難所になっている市内の小学校。娘とともに避難していた女性は「見ていて一番気の毒なのは、家族が行方不明の人たち。亡くなったと分かれば踏ん切りをつけて、がんばる気持ちもわいてくるんだけどね…」としみじみ話しました。

同じ教室で寝泊まりしている小学生の女の子は、お母さんが不明のまま。ずっと泣いているそうです。

この小学校の校長先生も「児童の死亡・行方不明だけで27人です。4月からの新学期のことは、まったく予定が立っていません」と悄然とした表情でした。

小学校の被害は、南三陸町の沿岸部ではさらに壮絶でした。

三階建ての校舎が津波にのみこまれた学校では、児童たちがあわてて逃げたのか、げた箱の上に10数個のランドセルが放り出されていました。幸い、海の近くまで山が迫っているため、高い場所に避難して助かった子どもたちが多かったようです。逆に平野部の沿岸にある小学校で「児童100人の半数が亡くなった」という話を聞きました。

ほかにも「あそこの建物の2階に避難した60人が全滅だった」とかとか「うちの集落で家が残ったの

は、1軒だけ」といった話が、ごく普通の会話として語られていました。

今回、私は医療支援の取材のために現地に入りましたが、被災地を目にして感じたのは「通信の備え」の大切さと、地元の専門職の力でした。

避難所となる学校や運動施設などにあらかじめ無線機を配置してあった自治体は、震災直後から災害対策本部との通信が可能になり、食料や毛布を必要な場所に届け、重症患者をヘリコプターで搬送するといった支援もスムーズに進みました。携帯電話が不通になって、情報が途絶した自治体は、道路の水没に支援の手も阻まれ、行政機能が数日間マヒしたりしました。

そうした初動の動きの差は、以降の避難所運営にも大きな差となって現れています。支援がスムーズに進まないことによって害を被るのは、高齢者や子ども、障害者たち。東海大地震のリスクにさらされている私たちも、住んでいる自治体がどんな備えをしているのか、よく知っておきたいものです。

また、行政の遅れを埋めて活躍したのは、地域の開業医、看護師、薬剤師、養護教諭といった人たちでした。自身も被災しながら、避難民の健康管理に尽力する多くの専門職たちの姿に胸を打たれました。

私たちも、被災した子どもたち・親たちを守るためにどんな支援ができるのか、日頃からイメージしておく必要があります。CAPNAとしても、災害時の相談電話の体制を検討する必要もありそうです。災害の半月後、ひと月後、ふた月後と、相談のニーズは変化していくはずですが。

日本子ども虐待防止学会は、今回の震災を受けて緊急に「社会的養護における災害時『子どもの心のケア』手引き」を作成しました。主として施設のケアワーカーを対象に、災害時の子どもの反応、初期対応の心構え、長期対応、保護者・家族との調整、家族を亡くした子どもへの対応などをまとめたものです。CAPNAのメンバーにも参考になる点は多いと思います。サイトから閲覧できます。

そして何より、今回の震災を忘れないこと。原発の放射能不安に右往左往したり、買いために走ったりする前に、自分の今の行動が被災者たちからどう見えるか、を意識して行動していきましょう。

仮設住宅ができて、当座の仕事が見つかって、被災者たちの心が癒えるわけではありません。彼らの苦しみ、悲しみを理解し、必要な支援を考える一人の市民であり続けたいものです。たぶんそれは、虐待を受けた子の気持ちを理解するのと同じ作業です。

埼玉県の立教新座高校の渡辺憲司校長は、震災の影響で卒業式が中止になった際、卒業生にあてた長文のメッセージの中で「鎮魂の黒き喪章を胸に、今は真っ白の帆を上げる時なのだ。愛される存在から愛する存在に変われ。愛に受け身はない」と記しました。恵まれた家庭で愛されて育ち、大学に進んでいく子どもたちに、主体性を持って生きることを問いかけた名文でした。

この言葉、私たち大人の一人一人にも突きつけられています。

